上伊那音楽教育研究会

ハーモニー

第３号
令和７年１１月２１日
文責　矢口由佳

授業から学ぶ

　１０月８日（水）に行われた研究会Ⅲでは、伊那市立西春近北小学校の６年けやき組の皆さんと齋藤朋恵先生に授業を公開していただき、互いに学び合う機会となりました。

　齋藤先生は課題意識のあった鑑賞の授業に挑戦され、動画づくりと交流を取り入れることで、子どもがより世界の様々な音楽の良さや面白さ、美しさを味わってほしいと願って題材を構想されていました。

　実際の授業では、同じ音楽を選んだ子ども同士で作った動画を見合い、似ているところや違うところについて語り合う場面で、私の見ていたグループでは、初めは動画を見た後もなかなか語り出せずにいたのが、齋藤先生の「背景が変わったところはどうして？」と問いかけたことに対し「タッタラと目的地に進んでいる感じ」と答えたやり取りをきっかけに、その後なぜその背景や素材を選択したのか語り合っていく姿に出合いました。

　授業研究会では、動画作りの意味や価値、共通事項の中でもどこへ焦点化するべきであったか、鑑賞の授業作りや教材研究のありかた、「発表」や「説明」といった活動の中にある「対話」や「協働的な学び」とは何かなどが話題になり、日々の実践を振り返りつつさらに考えたくなる時間となりました。

　一つの授業における子どもと教師の事実から、互いに考えを交流し合うことは、改めて自身の授業観や教材観を問い直す機会となっていくことを感じさせられ、大変学びの多い半日となりました。来年度からの方向も示されつつありますが、同じ地域の先生方と同じ授業から学び合う機会を大切にしていきたいものだと感じています。

授業をされた齋藤先生に授業を振り返って感じたことやその後の姿についてコメントをいただきました。

　何かつまらない、もっとおもしろくできないかなぁと常々感じていた鑑賞の授業への挑戦でした。子どもたちが飽きずに何度も曲を聴くことができる、やらされているのではなく、やりたくなってのめり込むことができる活動として、動画づくりというのは有効であったと感じています。

　動画を作って、見合って「おもしろい動画だね」で終わらず、音楽的なやりとりができるように「音色」という視点を設けたことで、子どもたちも「音色」に着目して作るんだ、観るんだ、ということは分かっていたと思います。しかし、適切な視点の設け方、どのような伝え合い方をすればより音楽的なやりとりができるか、というところにはまだまだ課題が残っていると感じているので、これからさらに研究を重ねていきたいと思います。

　また、今回の題材に取り組む中で、「この曲を聴いて、この子は音の感じをこんな言葉で表現するのね」「この音を聴いてそんな風景を思い浮かべるなんて素敵！」等々…子どもたちの素敵なところをさらに発見することができました。自分の中で子どもたちの見方が更新されたことも、１つ収穫だったと感じています。

その後の子どもの学びの姿から
・自分が選んだ曲について、その曲名、使用楽器、背景などがとても気になっている様子でした。こちらから提示するまでもなく iPad の「ミュージック認識機能」を使って自分で曲名を調べ、曲名が分かるとそれを検索し、使っている楽器や、どこの国の曲なのかを調べ進めている児童もいました。そんな機能が使えることを私自身知らなかったので、ただただ驚かされると共に、それだけ自分から「知りたい」「やりたい」が湧き起こっていることをとても嬉しく思いました。
・今回の授業で選ばなかった他の曲で、休み時間を使って新たに動画制作をしている児童もいました。その子は普段から大きな声で鼻歌を歌っているような、きっと音楽は楽しくて好きなのだろうなぁというような子なのですが、思いを言葉で表すとなると、表現するのは難しいところがあり、動画で表現するという今回の活動がフィットしたようで、それもまた嬉しく思いました。

この振り返りから、子どもの新たな一面を発見し、驚き、見方を更新されていく齋藤先生のお姿に学ばせていただきました。思いをかけた実践だからこそ、このような出合いがあるのだと感じます。日々の授業の中で、そうした場面をどれだけつくれているだろうかと自身に問いかけながら、また明日からの授業作りをしていきたいと思います。

また、感想記入用紙へ鑑賞の授業作りをどうされているかについて記入する欄がありました。先生方からどのようなことが寄せられたのか大変興味深く、齋藤先生にお願いして送っていただきましたので、これも共有させていただきます。

・いい音で、いい映像で、教師の気配は極力消して、子どもにじっくり、ゆっくり浸ってもらう。
・鑑賞では知識もたくさん伝えて、知識を取り込む喜びも味わえるように。
・曲の紹介文を書いてもらう。
・着目する部分を子どもが自分で決めて共有する、プレゼンテーションをする。
・要素が「ある」「ない」を比較することで、その要素の役割を感じられるようにする。
・ある程度表現に使える言葉を選べるように提示し、「こうやって言葉にすればいいのか」という学びを得ながら、自分の感じたことを表現していけるようにしている。
・聴き取ってほしい要素をしぼり、それに気づくための活動（身体表現・言語化・図形や絵や色で表す）などを考える。

授業者の齋藤先生、公開に携わってくださった西春近北小学校の先生方、けやき組の皆さん、改めて、感謝申し上げます。